

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2018年6月2日

文責：JUN

## つながり、夢中、気づき、そして、ドラマが

### ——「学び合う学び」で生まれるもの

#### 1 「学び合う学び」の世界

昨年の夏に刊行した『授業づくりで子どもが伸びる、教師が育つ、学校が変わる』（明石書店）の「はじめに」を、私は次のような文で書き始めています。

—— 子どもの目が期待で輝いている、夢中になって課題に向き合っている、学びの世界に没頭している、わからないことがあったら尋ねるし、気づいたことがあったら伝えようとする、仲間の言葉を温かく受け止め、寄り添い、ともに考える子どものやわらかく真剣な表情が心地よい、聴き合う教室、学び合う教室には、学ぶ楽しみと喜びがある、学び合うつながりがある、そして、すべての子どもに居場所感がある。——

私は述べたのは、「学び合う学び」には、子どものつながりがあり、学びへの没頭（夢中）があり、気づきの喜びがあるということでした。そこに、もう一つ、なんとしても付け加えたいことがあります。それは、「学び合う学び」の世界には「ドラマ」が生まれ、それがすべての子どもの居場所感になるということです。この一か月のうちに、立て続けにそのことを実感させてくれる二つの授業に出会ったことでその思いがますます強くなりました。そのうちの一つの事実をここにご紹介したいと思います。

#### 2 決定的な学びをもたらした子どもは！

それは、「走れ」（村中李衣作・東京書籍「新しい国語四年上」所収）という物語を読む授業において生まれました。

この物語は、足のおそい「のぶよ」という子どもの運動会にまつわるお話です。のぶよにはお父さんがいません。弁当の仕出し屋をしているお母さんと弟（けんじ）の3人家族です。運動会の日、忙しいお母さんが駆け付けた時には弟の短きより走は終わっていて、弟のご機嫌が悪くなったのです。その気まぐれ雰囲気のままのぶよの短きより走になりました。走る順番が近づいてきていよいよのぶよが走る番、この日の授業で読んだのは、そこからの場面でした。

ピストルが鳴り走りだすのぶよ。ところが、体が重いのです。（お母ちゃん、ショックだったろうな。でも、けんじもさみしくて……わたしだって本当は……）という思いが渦巻き体はどんどん重くなります。一生けん命走ろうとすればするほど、体が後ろへ下がっていくのです。もう走れない、そう思ったとき「姉ちゃん、行け！」「のぶよ、行け！」という弟とお母さんの声のがのぶよの耳に飛び込んできました。思わず、ぎゅんと足が出る、そしておしりがすわっと軽くなる、次のしゅん間、体にからみついていたいろんな思いが、するするとほどけていった、これがこの時間の授業の場面でした。

教室に一步足を踏み入れたとき、子どもたちと教師はなんともなごやかな雰囲気です。おだやかで温かいT先生の表情、子どもたちには研究授業の硬さはないかのようです。むしろリラックスし過ぎているのではと心配になるほどです。けれども、授業が始まると、しばらくの間を置いて、すうっとしっとりとした空気が流れ始めました。子どもたちが今から始まる学びに気持ちを集中させたのです。私は、その5分にも満たない教室の雰囲気に触れただけで、これから始まる学びで素敵なことが起きるという予感を抱いたのです。

授業は一人ひとりが自分の味わいで読む音読で始まりました。ゆったりした丁寧な読みです。32名の声が重なっているのに心地よさがあります。めいめいのペースで読むため、読み終わるのが遅くなる子どもがいます。けれども、早く読み終わった子どもは、まだ読んでいる子どもの声に聴き耳を立てているのです。なかには、聴こえてくる友だちの声に合わせて、教科書の文章を指でたどっている子どももいます。

全員が読み終わると、教師の指名による音読（代表読み）です。その読み声を聴いて、これまでT先生がどうのことを指導してきたかよくわかりました。三人が音読したのですが、どの子どもも、一つひとつの言葉を大切に丁寧に、そこに描かれている状況を浮かべるように声に出していたからです。そのように読めるということは、T先生が、この学級になってから一か月半、しっかり学ばせてきたからにちがいません。素晴らしいと思いました。

音読が終わって、T先生が子どもたちに告げたのは、「気になったなと思うところに、線を引いて書きましょう」という指示でした。子どもたちは、まずは一人ひとりが個別に文章に向き合い、線を引いたり何か書き込みをしたりしました。その間5分、やがて教師は、グループで聴き合うようにという指示を出しました。子どもたちがグループで取り組んだ時間は4分、どのグループにおいても、互いの考えをやわらかく、でも意欲的に聴き合っていました。

こうして授業時間が22分たったところで、教師から「聴かせてほしいので、合体してください」という指示が出ます。子どもたちは授業開始からここまで4人グループになっていたのですが、ここで机をコの字型に並べ替えます。授業開始からここまでで授業時間の半分が経過したのですが、実に落ち着いています。とにかくやるのが丁寧です。それでいて「読む」という学びに向かう子どもたちの誠実さと意欲があります。こうして参観する私たちは、この授業に心がひきつけられていったのです。

### ① まさしのドラマ

ドラマは、子どもたち全員で聴き合う態勢になると時間を置かずに生まれました。一人目の子どもが走り始めるときのぶよの頭の中は真っ白で何も考えられない状態になっていると語ります。次の子どもは、スタートラインに立とうとするのぶよの前が、前に並んでいた子どもたちがみんな走っていったので、急にひらけて広々していると語ります。二人ともこの場面の始まりのところについて語っています。どうやら子どもたちは文章の順に浮かんできた状況を語ろうとしているようです。T先生は、ここで、もう一度、一人ひとりで文章を音読するように指示します。それは、筋を追ってではなく、もっと直截に心が動いたことを語ってほしいと思ったからでしょう。それには、この流れを止め、改めて場面の状況に出会わせる必要があったのです。だから一旦文章に戻す音読を入れたのです。適切な判断です。

子どもたちは指示通り小声で音読をします。そうしておいてT先生は、再び子どもたちに気づきを出すように促します。その最初の子も、まさし（仮名）の発言がドラマの始まりになったのです。

まさしは、4年生になるまでに時折、自分の思うようにならないと情緒不安定になり他の子どもとの間でトラブルを起こすことがあり、なんとか落ち着いて生活できるようにしたいという思いで先生方が接してきた子どもだったそうです。その子どもが、大勢の参観者注視のなか、挙手をして自分の考えを述べようとしたことがT先生としてはうれしいことだったにちがいません。しかし、ドラマはまさしが発言したということだけではありませんでした。彼が語ったことがこの場面を読み味わううえでとても大切なことだったのです。まさしの語ったこと、それは次のようなものでした。

「のぶよは、体が重い、体がどんどん重くなると思ったんだけど、それは、後のところで『体にからみついていたいろいろな思いが、するするとほどけていった』と思ったから、からみついていた思いがあったから重く感じたんだと思う」

子どもたちが読んでいたこの場面は、弟とお母さんとの雰囲気が悪くなっていることに心を痛めたのぶよが、そんな気持ちを抱えたまま走るようになったのだけれど、二人の応援の声によって、その重い心持ちに変化が出るというところでした。まさしは、そののぶよの心持ちの変化を見事に感じ取っていたのです。

それが感じ取れるということは、まさしの心根に豊かな感受性があるからだと言えます。そうでなければこのように読めるわけがありません。友だちとの関係で数々のトラブルを引き起こしてきたまさしだけれど、ひょっとすると、そうなってしまっていたのは、彼にも何らかの「重いもの」、「体にからみついているいろいろな思い」があったのではないかと、そう思えます。そして、彼は、のぶよのようにからみついている「重さ」がほどけていくことに憧れがあったのかもしれない。もちろん4年生のまさしにそういう自覚があったとは思えません。けれども、文学作品に触れたとき、子どものなかに眠っていた何かは本人の自覚なしに表に出てくるという出来事に幾度となく出会ってきたわたしには、そう感じられるのです。

それはさておき、まさしが述べたことはこの場面の読み味わいにおいてなくてはならないものでした。この彼の気づきの大切さに他の子どもたちも気づき、ここからのぶよの心持ちの変化が味わえていったらどんなによいのでしょうか。もしそういうことになったら、まさしという子どもの存在がある種の心地よさとともに子どもたちの中に浸透していくからです。

しかし、事は、私が願ったようにうまくは運びませんでした。それぞれの子どもには、それぞれの語りたいたことがあったからです。深呼吸をして走り始めたときののぶよのこと、そのときののぶよの心の重さを語った子どももいました。一方、「思わずぎゅんと足が出た」のは、弟とお母さんの応援がうれしかったからだとか、その応援は二人がなかなかおりましたみたいでそれがうれしくて足が出たのだとか、重かった心持ちから解き放たれたのぶよのことを語った子どももいました。それはそれでしっかり読んでいます。けれども、「からみついていたいろいろな思い」と「体の重さ」とのつながりというまさしの読みを受け入れて、そのことによってのぶよにとって弟と母の存在がどんなに大切なものであったかを浮かび上がらせるまでには至りませんでした。

こういう時は、教師は急がないことです。きっと、まさしの気づきを生かせるチャンスが来る、そのチャンスを逃さない、そう心に言い聞かせ待つことです。

## ② いづみのドラマ

チャンスが訪れたのは、それから数分たったころ、一人の女の子の発言が小さな波紋を広げたところでした。しかし、その女の子が語ったことは、まさしの気づきを生かすチャンスになるだけでなく、新

たな二つ目のドラマが誕生させていたのです。

授業の前半において、子どもたちが書き込んだりグループになって聴き合ったりしていたことはすでに説明しました。そのときの事です。授業を参観していた私は「おやっ」と思いました。後ろのほうの一つのグループに、書き込んでいる素振りが見られないし、グループの聴き合いになっても話の輪に入れずずっと一人になっている子どもがいたからです。いづみ（仮名）です。気になったわたしは、ゆっくり彼女に近づき、机の上に置かれているペーパーをそっとのぞきました。ペーパーには本文が印刷されていて、そこに線を引いたり書き込みをしたりすることになっていたのですが、私の心配したとおり、彼女はほとんど書き込みができていませんでした。それ以降、私は、この子どものことを心に留めて授業をながめていたのです。

後からわかったことですが、この子どもは、日ごろ、授業においてほとんど言葉を発しない子どもで、仲間とのかかわりもうまくできないところのある子どもだったそうです。

そのいづみが、ここで手を挙げたのです。彼女のことを心に留めていた私はどきっとし、彼女がどんなことを述べるのか、どきどきする思いで耳をそばだてました。いづみが語ったのは、おおよそ次のようなことでした。

『一生けん命走ろうとすればするほど、体が後ろへ下がっていく』というのは、足が後ずさっているんだと思います』

このいづみの言葉を聴いて、私は本当にうれしくなりました。ほとんど書かず、仲間との話にも関わらなかったこの子が、ちゃんと読んでくれたのだ、そして、それを語ってくれたのだと思ったからです。そして、そのいづみの言葉を手元の用紙にメモし、はっと気づきました。先ほどの、まさしの読みとつなげられると思ったからです。これはまさしの読みをみんな読んでいけるチャンスになる、それが、ふだんほとんど言葉を発しないいづみから生まれ出た、私はふるえるような思いになりました。そして、この発言がどのようにみんなに受け止められ、読みの深まりにつなげられていくのかに注目したのでした。

ところが、ここで残念なことが起きました。それは、別の子どもが「後ずさりとは書いてないから、足が下がっていくということではないと思う」と述べて、あっさり否定されてしまったのです。確かに、走っているのぶよの足が後ろに下がっていつているわけではありません。それは、いづみの考えを否定した子どもの言うとおりです。しかし、いづみが述べた「後ずさる」という感じ方はとっても重要なことだったのでなかったでしょうか。このときののぶよの心理を見事に表したものだからです。弟と母とが揉めたことが心に引っ掛かり、それが「体の重さ」になっているのぶよにとって、その足取りはまさに「後ずさる」と感じるほどのものだったにちがいません。つまり「後ずさる」と感じるほどののぶよの心の重さと、まさしが提示した「からみついていた思い」とは同じものなのです。だから、いづみの出してきた「後ずさる」は、先ほどのまさしの気づきを生かせる絶好のチャンスとなるのです。しかもそれを出してきたのがほとんど言葉を発しないいづみだったのです。もし、この二人の気づきで学級みんなの読みが深まっていったら、それはまさにドラマです。今後の二人にとっても、二人にかかわる子どもたちとのつながりにとっても、この学級における人間的な学びの進展にとっても、大きな出来事になります。それは、シナリオにはない突然の出来事です。だからドラマなのです。

ただ、それが大きなドラマになるためには、そうなるための支えと方向づけが必要です。それは子どもにはできません。教師がやらなくてはならないことです。それを想定してみましょう。

「いづみさんが、のぶよの足が『後ずさる』と考えたのは、この時ののぶよのことをどのように思い浮かべたからなの？」

私はまずこのように子どもたちに問いかけたいと思います。そうすれば、のぶよが弟のこと、お母さんのことをどのように気にかけていたかを出してくるでしょう。そうしたら、それを受けて、

「その『体の重さ』って、さっきだれかが『体からみついていたいろいろな思い』なのだよって覚えてたよね。だれだっけ？」

とまさしのことを何気なく持ち出すのです。そうすればきっと何人かの子どもが覚えていて、「それ、まさしくんだよ」と言ってくるにちがいません。そしたら、

「そうだ、まさしくんだ。その考え、もう一度まさしくんに言ってもらって、みんなで聴こう」

と、まさしにもう一度語ってもらうのです。こうすれば、子どもたちは、「後ずさる」とまで思ってしまうのぶよの思いと「体からみついていたいろいろな思い」とをつなげることができます。

「いづみさんの『後ずさる』という感じ方はまさしくんが気づいた『体からみついていたいろいろな思い』とこんなにつながっていたんだね。そのところ、本文をだれかに読んでもらおう。それを聴きながら、そんなのぶよのことをみんなで想像しよう」

大事なことは、常に、文章に戻し、文章から感じ取ることです。子どもたちは、いづみの気づき、まさしの気づきから生まれたのぶよの状況を思い浮かべながら文章をたどります、『体からみついていたいろいろな思いが、するするとほどけていった』まで。そうすれば、「後ずさり」するほどの重い気持ちになっていたのぶよのその心の重さが「ほどけていった」ことを語りたくてたまらなくなります。そんな重さから解放されるうれしい出来事こそ、つらいことより楽しくなることこそ、子どもが望むものだからです。

それにしても、T先生の授業は本当に素晴らしかったです。子どもたちの表情のやわらかさ、子どもと子どもの間を流れる関係性の良さ、物語の読みに向く子どもたちの誠実さ・意欲、読みを学び合うことに対する集中、そして、T先生の誠実で丁寧な子どもに注ぐ眼差しの温かさ、そのすべてにおいて、これぞ「学び合う学び」の教室という感じを私たちにもたせてくれました。

そういう教室だからこそ、まさしといづみの二つのドラマが生まれたのです。教室がすべての子どもの居場所になっていたからです。すべての子どもにとって居場所になる教室、そこには良質の学び合いが存在しています。すべての人の考えを温かく聴くことでみんなが学んでいるからです。それは、すべての人の存在を尊重するつながりです。

T先生の学級にそういう空気が流れていたのです。だから、まさしといづみのドラマが生まれたのです。すべての子どもの学びを保障する「学び合う教室」になっていたから、学びの世界から置いて行かれそうな子どもから鮮烈なドラマが生まれたのです。

教師の指導が目立つ授業では、子どもによる学びは生まれません。教師の指示通りのことしか子どもにやらせていないからです。教師のパフォーマンスは、子ども自身の学びを阻むと考えるべきです。派手なパフォーマンスによる上手な指導は教師の自己満足にしかならないと考えるべきです。むしろ、子どもの姿を前面に出し、しつとりと、温かく、慈愛に満ちた視線を向け、どの子どもにも可能性があると思っていて子どもが生み出すものを待つべきです。もちろん、それは子どもに丸投げをすることではありません。教師の見識と子どもの事実を見る眼力がなければ生まれるものも生まれません。教師に必要なのは、指示通り教えるパフォーマンスではなく、子どもの学びを促進する「対応力」なのではないでしょうか。それがなかったら、「主体的・対話的で深い学び」は決して生きたものにならないでしょう。

## 信念を貫くとは固執することではない

教師に限らず、自分自身の考え方を頑固に崩さない人がいます。もちろん、右に左にころころと変節する人もいます。生きるということは、さまざまな人や出来事との出会いなのですから、その出会いのたびに擦り合わせが起こり、深い共感も強い反発も生まれ、そこから新たなつながりが出来ることも深刻な亀裂・断絶が生じることもあります。私は、そういう出会いのあり方に、その人の人柄は もちろん人生観や職業観、見方考え方があらわれると考えています。それはその人の人格だと言ってもいいのではないのでしょうか。

右に左に変節する人には信念がないのではないかとよく言われます。逆に、だれが何といても考え方を変えない人のことは、頑固一徹過ぎてとっつきにくいとも言われます。そこから見えてくるのは、信念を貫くことは大切なこと、一方、あまりにも自分の考えに固執することはよくないことという生き方です。私たちは、だれもが、この二つの狭間で揺れながら、揺れない人もいるにはいますが、多くの人は迷いや悩みを生じさせ絶えず揺れているのではないのでしょうか。

ただ、ここではっきりさせておきたいことがあります。それは、信念を貫くということと固執するという事は同じではないということです。その違いはどこにあるのでしょうか。

信念とは正しいと堅く信じることです。ただ、そのとき、なくてはならないことがあります。それは事実に対する謙虚さです。人がどのように考えようがそれはその人の自由だと言う人がいます。しかし、子どもたちの未来を担う教育に携わる教師は、その信念が多くの子どもに影響を与えるものだとすることを忘れてはなりません。事実がどうなっていようとも、それは私の信念だと言って済ませることはできないのです。もっとも大切なものは、子どもに表れる事実です。

教師は事実をみる目と感覚を養わなければなりません。そして、事実から学ばなければなりません。それまで「これはこうだ」と考えていたこと、つまり自分の考え方も、事実との突き合わせによって変えていく勇気を持たなければならないのです。信念を貫くとは、何も変えないことではなく、事実を基に自らのあり方を創造していくことなのではないのでしょうか。

それに対して、いつまでも固執するとはどういうことでしょうか。それは、事実を見ようとしないことです。事実がどうあろうと、自分の考え方を変えないことです。それは、いまある自分を守ろうとする考え方です。そして、事実から学んで、よりよい自分を創造するのではなく、自分の頑なな考え方ややり方に、事実を合わせようとする事です。そうなってしまうと、事実を自分の色眼鏡でしか見ないので、自分の周りに生まれている素晴らしいものも、そうでないものも見えなくなってしまいます。そして最終的には異なる考えに対する感情的拒絶を抱くようになってしまいます。

教師の場合こわいのは、そういう姿勢のちがいが、すべて子どもに跳ね返っていくことです。たくさん子どもたちの未来につながる日々を請け負っている私たち教師が、ゆるぎなく一貫して目指していかなければいけないのは、子どもの成長、学びの深まりにつながる教師としてのあり方です。迷っていい、悩んでいいのです。その迷い、悩みの中から、事実をみつめ、事実から学び、教師としての信念を求め続けていきたい、第一線から退いた今でも、私はそう思います。